

日本教育心理学会第60回総会
JB03 保育における実践知へのアプローチ

保育者の実践知を共有化するツール としてのパターン・ランゲージ

東京大学Cedep × 慶應義塾大学井庭研究室
共同研究プロジェクト

東京大学大学院教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター
野澤 祥子

本発表の目的

● パターンランゲージとは

ある領域における問題発見・解決の実践知を言語化したもの。
実践知を共通言語（パターン名）によって可視化・共有化し、他者と経験を語り合い、ともに新たな方法を生み出すための支援ツールになりうる（井庭，2013）。

● 共同研究プロジェクト

東京大学発達保育実践政策学センターと
慶應義塾大学井庭研究室の
共同研究プロジェクト



<http://ilab.sfc.keio.ac.jp/>

「ミドルリーダーの実践知に関するパターン・ランゲージプロジェクト」

● 本発表の目的

プロジェクトの背景と概要を紹介する

保育者の実践者を可視化・共有化する新たな方法としてのパターンランゲージの意義を考える

プロジェクトの背景

保育における実践知

教師・保育者の実践知とは

「学問的理論や知識の単なる適用ではない、個別具体的な状況で発揮され更新される実践者独自の暗黙の知識や思考様式、方略の総体」
(砂上他, 2012)

教師・保育者の実践知研究

- Schwab (1969) による教師固有の実践的知識の理論的提示を起源とし、Schön (1983) による「反省的实践家」という専門家像と結び付けられ発展してきた (坂本・秋田, 2012; 佐藤, 1996; 1997)。
- わが国でも教師の語り等を通じた教師の実践知研究が積み重ねられてきた (別惣, 2017)。
- 保育者の実践知に関しては、保育者の語り、質問紙への回答、実践の観察等から、具体的な場面に埋め込まれた暗黙知を明示化しようとする研究がなされてきた (レビューとして、野澤・井庭他, 2018)。

保育における実践知の特徴

- 個人、園、社会・文化といった多層的な文脈により規定される（レビューとして、野澤・井庭他, 2018）。
- 園を取り巻く文脈には、園の物理的（空間・時間的）要因、場や道具、社会的環境、保護者のニーズといった、さまざまなものがある（秋田, 2016）。

⇒多層的文脈に規定され、複雑性・多義性を含む関係論的な知の特徴を踏まえながら検討する必要がある。

省察と対話の重要性

- 協同で保育にあたるための知の形成・共有が不可欠（秋田、2016）
- 保育者同士の対話は、実践知の変容（Wood & Bennett, 2000）、子ども理解の深化・発展（榎沢, 2016）、探求的態度の形成（中坪, 2016）、実践知の次世代への継承（友定, 2017）等に寄与する。

⇒保育者が他の保育者との対話により、実践での課題・問題に気づき、それを乗り越え創造性を獲得していく過程そのものを「支援する」ためのアプローチが必要では？

対話による実践知の共有を支援する方法としての パターン・ランゲージ

● パターンランゲージとは

ある領域における問題発見・解決の実践知を言語化したもの
実践知を共通言語（パターン名）によって可視化・共有化し、他者と経験を語り合い、ともに新たな方法を生み出すための支援ツールになりうる（井庭，2013）。

● パターンランゲージの提唱者

建築家クリストファー・アレグザンダー
よい町やよい建物に繰り返し現れる関係性を
「パターン」と呼び、それを「ランゲージ」
（言語）として共有する方法を考案

（Alexander, et al., 1977; Alexander, 1979）



● パターンランゲージの発展

建築分野でのパターン・ランゲージの提案
ソフトウェアの分野での応用・展開
人間行為への応用

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%A2%E3%83%AC%E3%82%B0%E3%82%B6%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%BC>

人間行為へのパターン・ランゲージの応用

● 慶應義塾大学井庭研究室

人間行為へパターン・ランゲージを応用
独自の метод論を開発・洗練

単発の事例ではなく、
よりよい実践に
共通して（共通**パターン**が）
見い出せるものに注目

実践や実践知について語り合い、
考え学ぶための「言葉」のセット
（**ランゲージ**）をつくる

（井庭, 2018）

<https://www.slideshare.net/takashiiba/cedep>

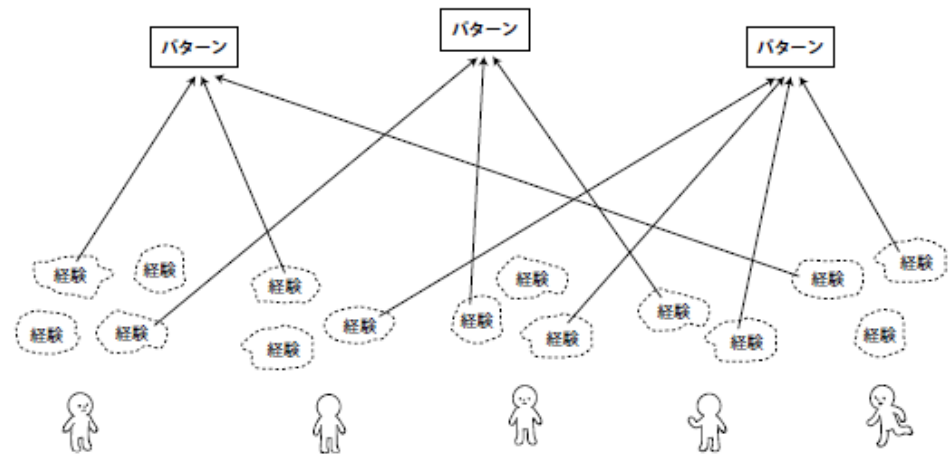


図 3 - 1 複数の経験の共通パターンの抽出

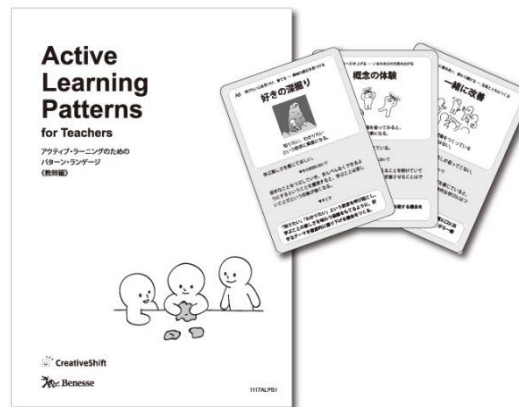
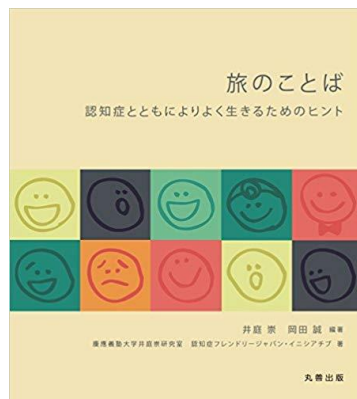


図 3 - 3 「状況」「問題」「解決」「結果」の関係性に名前をつける

さまざまな分野でのパターン・ランゲージ

● 慶應義塾大学井庭研究室

さまざまな分野でのパターン・ランゲージを作成（30種類以上）



➤ パターン・ランゲージの具体例

● 旅のことば：

- 認知症とともによりよく生きることを支援するパターン・ランゲージ
(井庭・岡田, 2015)

パターン名：自己紹介グッズ

イントロダクション：百聞は一見にしかず。見せるものがあれば、もっと伝わる。

パターン・イラスト：



状況：いろいろな場面で人と出会う機会が増えてきました。

問題：自己紹介や最近のことを話すとき、思うようにことばが出なかったり、時間がかかったりして、うまく伝えられないこともあるかもしれません。

解決：小さなアルバムやノートに、自分のことをあらわす写真などを入れて持ち歩くようにします。

結果：自分のことを、焦ることなく自分のペースで伝えることができるようになります。さらに・・・（抜粋）

プロジェクトの概要

保育者のパターン・ランゲージプロジェクト

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）
と慶應義塾大学の井庭研究室との共同

ミドルリーダーへの着目

：園のリーダーシップにおけるミドルリーダーの重要性

主任保育者へのインタビュー
問い：

「主任のリーダーシップとして大事にしていること（その理由も含めて）」「主任として園全体を率いるコツ」

表1 インタビュー協力者および実施日の内訳

インタビュー実施日		園種別	インタビュー協力者数 (カッコ内は職名の備考)
第1回	2017年2月23日	公立幼稚園	3
第2回	2017年3月17日	公立幼稚園	3
第3回	2017年4月5日	私立幼稚園 (1件が幼稚園型認定こども園)	3 (うち1名が副園長)
第4回	2017年4月7日	私立幼稚園	3
第5回	2017年4月12日	私立幼稚園	4
第6回	2017年6月7日	私立保育所	3 (うち1名が副園長)
第7回	2017年6月30日	私立保育所	3
第8回	2017年7月19日	公立保育所	3 (いずれも副園長)
合計			25

パターン・ランゲージの作成

単発の事例ではなく、
よりよい実践に
共通して（共通**パターン**が）
見い出せるものに注目

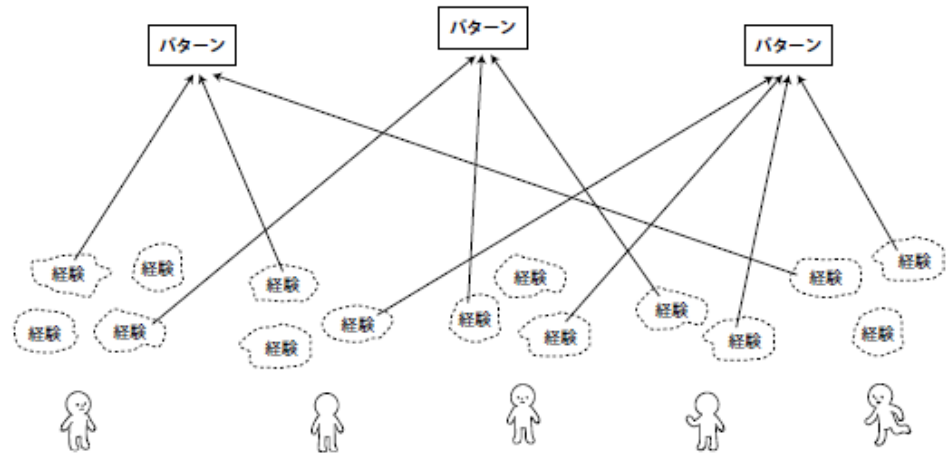


図 3 - 1 複数の経験の共通パターンの抽出

実践や実践知について語り合い、
考え学ぶための「言葉」のセット
（**ランゲージ**）をつくる

（井庭, 2018）

<https://www.slideshare.net/takashiiba/cedep>



図 3 - 3 「状況」「問題」「解決」「結果」の関係性に名前をつける

（野澤・井庭他, 2018）

東京大学Cedep × 慶應義塾大学井庭研究室 共同研究プロジェクト成果

ミドルリーダー・パターン

よりよい園をつくる主任保育者のパターン・ランゲージ

東京大学大学院教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター (Cedep)

×

慶應義塾大学 井庭崇研究室

2018年8月

A：保育者として成長していく環境をつくる

B：人をつなぐことで子どもが育つ場をつくる

C：保育に関する既成概念をつくりかえていく

A1. 一日の共有
A2. 見通しの一言
A3. 楽しむきっかけ

B1. あいだの通訳
B2. 声のすくい上げ
B3. みんなで育てる

C1. 子どもとの時間
C2. より大きな意味での保育
C3. 新たな試み

A4. 日頃のおしゃべり
A5. ひと呼吸おく
A6. がんばりへのリスペクト

B4. 経験のミックス
B5. 会話が生まれるしかけ
B6. 根底の思い

C4. ワクワクの素材
C5. 飛び入り参観
C6. 強みの芽

A7. やる気が出るチャレンジ
A8. 学びへの転換
A9. 理念に立ち戻る

B7. 意義の共有
B8. 信頼の橋渡し
B9. とともに育てるパートナー

C7. 園を超えた学び
C8. 充電タイム
C9. 未来のリーダー

見通しのひとこと

見通しを持てる助言は安心につながる。



Context 状況

子どもへの対応に困っていたり、トラブルに直面していたりする保育者がいます。

Problem 問題

▼その状況において

自分が担当保育者に代わって、全面的に対処してしまうと、次に似たような問題が生じたときに保育者が自分で対処して乗り越えていく力が育ちません。現場での経験を積んでいればいるほど、「自分で対処した方が手際よく解決できる」という考えが頭をよぎるものです。しかも管理職であるという責任感から、つい率先して介入しようと思いがちです。しかし、そうやって

事態に対処していくと、いつでも自分が介入しなければ解決しないという状況になってしまいます。

Solution 解決

▼そこで

自分が介入して解決するのではなく、保育者自身が解決できるようになるための助言をします。たとえば、「〇〇してみてもいいから。」など、今優先的にとるべき行動は何かと、その理由を簡潔に伝えます。そのときは、問題に直面している保育者の力量に合わせて、理解しやすくすぐに具体的な行動に移せるように言うようにします。ただし、子どもの生命にかかわるような緊急性が高い問題の場合には、主任保育者自身か、他のベテラン保育者が率先して迅速に対応し、状況が落ち着いてから保育者本人と一緒に振り返って対応の仕方について教えます。

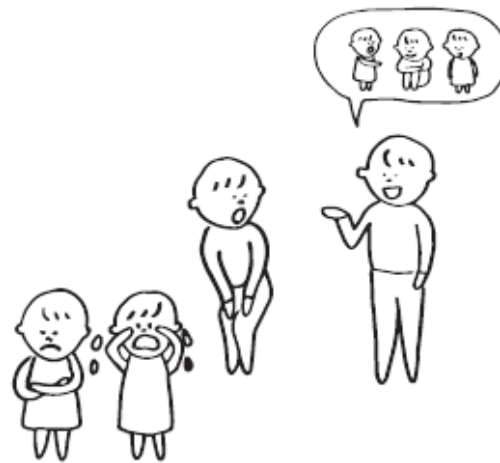
consequence 結果

▼その結果

保育者らは自分が直面している問題の複雑さが整理され、具体的な行動に移しやすくなります。また、同時に、その対応についての根拠も教えてもらうことで長期的な見通しをもてるようになり安心感にも繋がります。今後、同じような問題に遭遇した時にどう向き合うかを学ぶ機会となります。このように、見通しを示す主任保育者からのアドバイスは、保育者らが子どもの成長を長いスパンで丁寧に見守るための力を養うことにも繋がります。

見通しのひとつ

見通しを持てる助言は安心につながる。



自分が介入して解決するのではなく、保育者自身が解決できるようになるための助言をします。

根底の思い

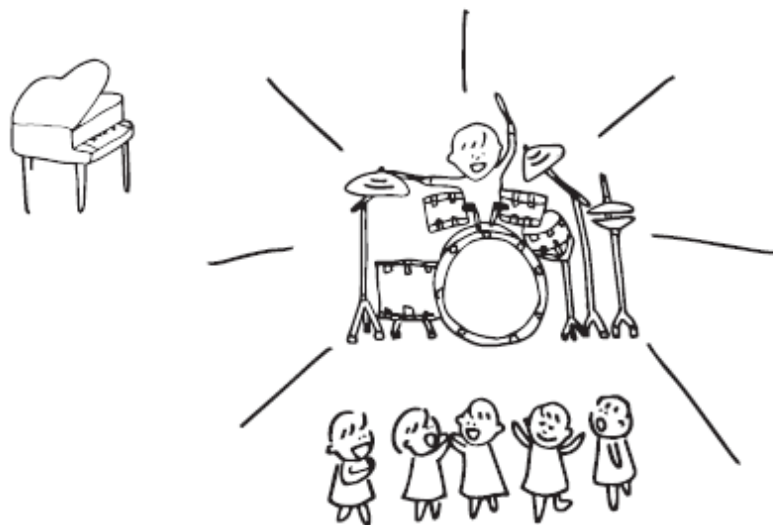
子どもへの願いを言葉にすると、
すれ違いの出口が見える。



主任保育者自ら介入し、対立している保育者らそれぞれの
考えの根底を探り、両者の「子どもへの思い」に焦点をあ
て、問題を整理して一緒に考えます。

新たな試み

経験知に囚われ過ぎず、自分を更新していく。



保育に関わるときには、自分が常々やってみたいと思っていた未知なることをあえて試し、自分にとってのチャレンジの場とします。

保育の実践知を
可視化・共有化する
アプローチとしての意義

実践知を可視化・共有化する方法としての意義

(野澤・宮田・天野, 2018)

● 文脈に即し、関係性を含み込みながら「適度に」抽象化

- 保育者の実践知は論理命題的、「if-then」型の知ではない
- 具体的文脈や複雑で関係論的な知を含み込みながら「経験則」を示せる
→読み手が自分事としながら次のアクションを想像・創造できる

● 複数人のチームで分析する協働生成的

- 保育者の対話（グループインタビュー）を、対話によって分析するという対話の二重構造がある
- 多様な背景を持つ研究者が各々の視点を持ち寄りながら分析することで、思い込みの排除や「自明」の問い直しにつながる
- 保育者の語りに含まれる、複雑で多義的な保育実践の知について、対話的に掘り下げながら、よりよい方向への質を明示化する
- 分析において対話を積み重ねることで、時間はかかるが、創造的であると同時にメタ化され、汎用性の高いものになる

実践知を可視化し、共有化する他の方法との比較

(野澤・宮田・天野, 2018)

● KJ法

- データや事例、アイディアに共通する事項を見出し、**ボトムアップに整理・組織化**する
- 共同で行うことで、コミュニケーションが促され、チームワークが高まる (中坪, 2018)

● 保育を写真をもとに語る

- 写真をもとに対話が引き出され、**保育者相互の見識や実践知の交流**ができる
- **個別具体的な場面や環境構成から**気づきや学びを得ることができる
- 時間的制約を受けにくい

それぞれの特徴
とよさ

● パターンランゲージ

- 共通項を見出すだけでなく「**状況**」「**問題**」「**解決**」「**結果**」を分析、記述する
- パターンランゲージをもとに対話が生まれ、**実践知の共有による気づき**を得ることができる
- 複数の人の経験に共通する**経験則**（**コツや知恵**）を**ヒント**に、新たな方法やアイディアを**想像・創造**できる

引用文献

- 秋田喜代美 2016 保育学としての問いと研究方法. 日本保育学会（編）保育学講座1 保育学とは問いと成り立ち（pp.91-121）. 東京大学出版会.
- Alexander, C., Ishikawa, S., Silverstein, M., Jacobson, M., Fiksdahl-King, I., & Angel, S. 1977. A Pattern Language: Towns, Buildings, Construction, Oxford University Press（平田翰那 訳 1984 パタン・ランゲージ：環境設計の手引 鹿島出版会）.
- Alexander, C. 1979. The Timeless Way of Building, Oxford University Press（平田翰那 訳 1993 時を超えた建設の道 鹿島出版会）
- 別惣淳二 2017 教師の実践的知識 日本教師教育学会（編）教師教育研究ハンドブック（pp.270-273）. 学文社.
- 榎沢良彦 2016. 保育者の専門性. 日本保育学会（編） 保育学講座 4 保育者を生きる 専門性と養成（pp 7 -25）. 東京大学出版会.
- 井庭崇 編著 2013 パターン・ランゲージ：創造的な未来をつくるための言語 慶應義塾大学出版会.
- 井庭崇 2018 ミドルリーダーパターン よりよい園をつくる主任保育者のパターン・ランゲージ 東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター(Cedep)公開シンポジウム 「豊かな人生を紡ぐ保育」～Society5.0保育から社会を変える
発表スライド <https://www.slideshare.net/takashiiba/cedep>
- 井庭崇・岡田誠 編著 2015 旅のことば：認知症とともによりよく生きるためのヒント 丸善出版
- 中坪史典 2016 保育実践と省察. 日本保育学会（編）保育学講座 4 保育者を生きる 専門性と養成（pp27-43）. 東京大学出版会.
- 中坪史典 2018 保育を語り合う協働型園内研修のすすめ—組織の活性化と専門性の向上に向けて. 中央法規出版.

引用文献

- 野澤祥子・井庭崇・天野美和子・若林陽子・宮田まり子・秋田喜代美 2018 保育者の実践知を可視化・共有化する方法としての「パターン・ランゲージ」の可能性 東京大学大学院教育学研究科紀要, 57, 429-449.
- 野澤祥子・宮田まり子・天野美和子 2018 「パターン・ランゲージ」による主任保育者の実践知の可視化と共有化（1）日本保育学会第71回大会 K-B-11.
- 坂本篤史・秋田喜代美 2012. 教師. 金井壽宏・楠見孝（編）実践知－エキスパートの知性（pp. 174-194.）. 有斐閣.
- 佐藤学 1996 教育方法学 岩波書店
- 佐藤学 1997 教師というアポリアー反省的实践へ 世織書房.
- Schön, D. 1983. The reflective practitioner: How professionals think in action. New York: Basic Books.
- Schwab, J.J. 1969 The Practical: A Language for Curriculum, The School Review 78, pp.1-23.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 2012. 幼稚園の片付けにおける実践知：戸外と室内の片付け場面に対する語りの比較. 発達心理学研究, 23, 252-263.
- 友定啓子, 2017 対人葛藤における社会化－自己創出を支える 友定啓子・青木久子（編）幼児教育知の探究16 領域研究の現在＜人間関係＞（pp.108-155） 萌文書林.
- Wood, E. & Bennett, N. 2000. Changing theories, changing practice: exploring early childhood teachers' professional learning. Teaching and Teacher Education, 16, 635-647

付記

研究にご協力くださった、主任保育者の皆様に感謝申し上げます。

本研究は、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（秋田喜代美、天野美和子、宮田まり子（協力研究者、白梅学園大学）、若林陽子）と慶應義塾大学井庭崇研究室との共同研究として実施しているものです。

下記文献は、Cedepウェブサイトでダウンロードできます。
<http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/efforts/>

野澤祥子・井庭崇・天野美和子・若林陽子・宮田まり子・秋田喜代美 2018 保育者の実践知を可視化・共有化する方法としての「パターン・ランゲージ」の可能性 東京大学大学院教育学研究科紀要, 57, 429-449.